

# 大学生の被養育経験が児童虐待意識と実行可能性に及ぼす影響

山 田 洋 平

(保育教育学科)

Effects of Experiences Being Parented in University Students on Awareness and Feasibility of Child Abuse

Yohei YAMADA

キーワード：児童虐待，世代間連鎖

child abuse, generational chain

## 1. 問題と目的

児童虐待は、「児童虐待の防止等に関する法律（以下、児童虐待防止法）」によると、保護者が監護する児童に対して、身体的虐待（「児童の身体に外傷が生じ、又は生じるおそれのある暴行を加えること」）、性的虐待（「児童にわいせつな行為をすること又は児童をしてわいせつな行為をさせること」）、ネグレクト（「保護者としての監護を著しく怠ること」）、心理的虐待（「児童に対する著しい暴言又は著しく拒絶的な対応、児童が同居する家庭における配偶者に対する暴力、その他の児童に著しい心理的外傷を与える言動を行うこと」）の4つを行うことである。近年、児童相談所における児童虐待相談の対応件数は年々増加しており、平成29年度の対応件数は前年度より約1万件増の133,778件であった（厚生労働省、2018）。

児童虐待は言うまでもなく、子どもの心身への健康に大きな影響を及ぼし、身体面（栄養不良により発育や発達の遅れなど）、精神面（愛着障害、解離、抑うつなど）、行動面（衝動性・攻撃性、自傷行為、ためし行動など）などの健全な発達を妨げる（文部科学省、2007）。そのため、児童虐待の早期発見・早期対応とともに、児童虐待の未然防止に向けた取

組が求められており、児童虐待の加害動機や発生要因に関する研究が多く行われている。児童虐待の直接的な加害動機については、児童虐待死事例を調査した厚生労働省（2019）の報告によると、加害の動機として「保護を怠ったことによる死亡」「しつけのつもり」「子どもの存在の拒否・否定」「泣きやまないことにいらだったため」が毎年多いことが示されている。

次に、児童虐待の発生要因については、山縣（2013）が（1）親や子どもの個人的要因（親の人格、婚姻状況や結婚年齢、アルコールなどの乱用、親の被害経験、子どもの健康状態や人格など）、（2）家族的要因（家族構成、育児ストレス、育児スタイルなど）、（3）環境・地域社会要因（貧困や地域社会の暴力、社会的孤立）、（4）社会的・文化的要因（家族の習慣や方針、人種差別など）の4要因を挙げ、これらの要因のいくつかが重なった時に児童虐待が発生しやすいと述べている。つまり、児童虐待には様々な要因が複雑に絡んでいることが分かる。中でも、親の被害経験として「虐待の世代間連鎖」についての研究が多くなされている。

虐待の世代間連鎖は「幼少期に虐待を受けていた子どもが、親になった時に自分自身の子どもの

虐待をしてしまう」ことを指す(曾田・大河原, 2014)。これまでの研究では、例えば八重樫(2005)が、母親の身体的被虐待経験と子どもに対する身体的虐待経験の関連性が高いことを示すなど、様々な研究によりその影響が実証されている(Hammond, Landry, Swank & Smith, 2000; Thonberry, Freeman-Gallant, Lizotte, Krohn, & Smith, 2003など)。また、虐待の世代間連鎖の発生率は、調査方法によって変動するものの、概ね30%前後とみられており(Olibver, 1993)、日本では25.9%という結果が報告されている(中嶋, 2004)。そのメカニズムについては、例えば曾田・大河原(2014)が「愛着システム不全のモデル」によって説明している。このモデルでは、幼少期に養育者から不適切な関わりを受けたことで、感情制御の発達に困難が生じ、親になった際に我が子への怒りを制御できずに虐待してしまうという過程が想定される。このモデルに従うと、厚生労働省(2019)の報告のうち、「子どもの存在の拒否・否定」「泣きやまないことにいらだったため」という加害動機を説明することができる。

一方で、「しつけのつもり」という加害動機は、保護者の感情制御の困難さによるものとするモデルで説明することは難しい。西澤(2010)によると、「しつけとは、子どもの利益のためになされる行為であり、虐待とは、親などの子どもの養育者が自らの利益のためになす行為」としており、両者は質的に異なる行為であると述べている。つまり、「しつけのつもり」を動機とする児童虐待の加害者は、自分の子どもや子育てに対するネガティブな情動を発散するという自らの利益のためになす行為ではなく、子どものことを思いやり、しつけの一環として当該行為を行っていることになる。そのため、「しつけのつもり」を加害動機とする児童虐待は、「子どもの存在の拒否・否定」「泣きやまないことにいらだったため」を加害動機とする児童虐待とは異なる要因が考えられる。この点について、厚生労働省(2013)が、「ネグレクト家庭の中で育つ子どもは、不十分な養育が『当たり前』として育つため、自分が親になった時にも、自分の子どもに適切な養育を行えな

くなる可能性がある」ことを指摘している。この指摘を虐待全般にあてはめた場合、自身が幼少期に受けた養育経験を「当たり前」と思うことによって、虐待意識が低下すると考えられる。虐待の世代間連鎖と関連づけて考えると、自身の被虐待経験によって、虐待行為に対する意識が低下し、虐待が発生しやすい状況になる可能性が考えられる。

そこで、本研究では被養育経験が虐待に対する意識および虐待の実行可能性に及ぼす影響を検討することを目的とする。

## 2. 方法

### 1) 調査対象者および調査期間

A県内の私立大学に在籍する大学生90名(1年生32名, 2年生57名, 不明1名)が調査対象者となった。調査対象者に対して、2018年11月中旬に以下の調査を実施した。

### 2) 調査内容

(1) **被虐待経験** 児童虐待に位置づけられる「身体的虐待」、「心理的虐待」、「ネグレクト」の行為と、児童虐待ではないが不適切な養育と思われる行為(「過度のしつけ」)について各2項目の全8項目について、幼稚園や小学校時代を思い出して回答を求めた。各項目の回答は、「何度も経験がある」、「経験がある」、「経験がない」の3件法であった。得点は、「何度も経験がある」3点、「経験がある」2点、「経験がない」1点を配点した。

(2) **虐待に対する意識** 上記、調査内容(1)の8項目について、保護者が子どもに対して行う行為として、しつけの範囲を超えていると思うかどうかを尋ねた。各項目の回答は、「超えている」「どちらかといえば超えている」、「どちらかといえば超えていない」、「超えていない」の4件法であった。得点は、「超えている」から順に4～1点を配点した。

(3) **虐待の実行可能性** 上記、調査内容(1)の8項目について、あなたが将来保護者になった時に項目のような行為ををすると思うかを尋ねた。各項目の回答は、「そう思う」「ややそう思う」、「あまりそう

思わない」,「そう思わない」の4件法であった。得点は,「そう思う」から順に4~1点を配点した。

### 3) 倫理的配慮

調査に当たっては, a) 調査協力は任意であり協力しないことで不利益を被ることは一切ないこと, b) 調査で知り得た情報は本研究以外では使用しないこと, c) 質問紙への回答をもって調査協力への同意が確認されることを調査対象者に口頭で伝えた。

## 3. 結果と考察

### 1) 分析前の手続き

#### (1) 因子分析および信頼性の検討

「虐待に対する意識」の8項目について, 最尤法・プロマックス回転による探索的因子分析を行った結果, 固有値の減衰状況や解釈可能性を基準に2因子解が妥当と判断した。複数の因子で因子負荷量が.25以上であった2項目を削除し, 分析を行った結果, 6項目による2因子が抽出された(Table 1)。第1因子は,「子どもを殴ったり, 蹴ったりする」「子どもに暴言を言う」「子どもの最低限の世話をしない」といった身体的虐待・心理的虐待・ネグレクトに該当する項目で構成された。そこで第1因子を「虐待」と命名した。第2因子は,「子どもに行き過ぎた期待をする」「子どもに過剰な干渉をする」といった項目から構成された。行き過ぎた期待や過干渉は, 不適切な養育として虐待に含まれることもあるが(文部科学省, 2007), 児童虐待防止法には明記されていない行為である。本研究では, 児童虐待防止法に従い, 第2因子を「過度なしつけ」と命名した。各因子の $\alpha$ 係数を算出したところ, いずれも十分な値(ともに $\alpha=.83$ )を示した。

#### (2) 得点の算出と被虐待経験による分類

「被虐待経験」「虐待に対する意識」「虐待の実行可能性」のそれぞれについて, 因子ごとに各項目の得点を加算し項目数で除した値を下位尺度得点とした。次に,「被虐待経験」の虐待因子の得点を基準に, 調査対象者を被虐待経験無群(=1点)と被虐待経験有群(>1点)に分類した。

## 2) 虐待と過度なしつけについての検討

### (1) 虐待に対する意識の検討

虐待に対する意識について, 被虐待経験(有・無)と下位尺度(虐待・過度なしつけ)による分散分析を行った結果, 被虐待経験の主効果が有意傾向であり( $F(1,88)=3.84, p<.10$ ), 被虐待経験有群より経験無群の得点の方が高かった(Table 2)。このことから, 被虐待経験によって児童虐待に対する意識が低くなる可能性が示唆された。また, 下位尺度の主効果が有意であり( $F(1,88)=92.38, p<.001$ ), 過度なしつけ得点より虐待得点の方が高かった。このことから, 被虐待経験の有無に関係なく, 児童虐待行為が過度なしつけ行為よりも, 児童虐待に該当するという認識があることが分かる。ただし, 過度なしつけ得点(2.86)も中央値(2.50)より高いことから, 調査対象者はしつけとして行き過ぎていると感じていた。このことから, 被虐待経験にかかわらず, 法律によって虐待と定義されていない不適切な行為についても, 高い虐待意識を有していることが示された。

### (2) 虐待の実行可能性の検討

虐待の実行可能性について, 被虐待経験(有・無)と下位尺度(虐待・過度なしつけ)による分散分析を行った結果, 被虐待経験と下位尺度間の主効果が有意であり(被虐待経験 $F(1,88)=15.41, p<.001$ , 下位尺度 $F(1,88)=56.93, p<.001$ ), 被虐待経験有群の方が経験無群よりも得点が高く, 虐待得点よりも過度なしつけ得点の方が高かった(Table 3)。ただし, 過度なしつけ得点と虐待得点は, いずれも中央値(2.50)よりも低かった。このことから, 被虐待経験がある者の方が過度なしつけを含む虐待行為を行う可能性を高く認識しており, 虐待の世代間連鎖による影響が少なからず存在することが確かめられた。

## 3) 虐待因子についての詳細な検討

### (1) 虐待に対する意識の検討

虐待について詳細な検討を行うため, 虐待因子の4項目(「暴言を言う」(以下, 暴言とする),「最低

Table1 因子分析の結果

	I	II
I 虐待 ( $\alpha=.83$ )		
殴ったり, 蹴ったりする	.86	-.09
暴言を言う	.82	-.02
熱湯などをかけてやけどを負わす	.70	.07
最低限の世話をしない	.56	.14
II 過度なしつけ ( $\alpha=.83$ )		
過剰な干渉をする	-.03	.99
行き過ぎた期待をする	.07	.70
因子間相関		.33

Table 2 虐待に対する意識における分散分析の結果

		被虐待経験				経験	意識	経験×意識
		無( $n=56$ )		有( $n=34$ )				
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)
虐待意識	虐待	3.76	.51	3.43	.61	3.84 +	92.38 ***	1.86 <i>n.s.</i>
	しつけ	2.91	.71	2.78	.71	無>有	虐待>しつけ	

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , + $p<.10$

Table 3 虐待の実行可能性における分散分析の結果

		被虐待経験				経験	可能性	経験×可能性
		無( $n=56$ )		有( $n=34$ )				
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)
虐待可能性	虐待	1.12	.28	1.46	.38	15.41 ***	56.93 ***	0.00 <i>n.s.</i>
	しつけ	1.61	.65	1.94	.53	無<有	虐待<しつけ	

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , + $p<.10$

Table 4 虐待因子の各項目についての虐待に対する意識における分散分析の結果

		被虐待経験				経験	意識	経験×意識
		無( $n=56$ )		有( $n=34$ )				
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)
虐待意識	a. 暴言	3.68	.96	2.91	.82	7.60 **	25.19 ***	17.53 ***
	b. 世話をしない	3.64	.67	3.71	.71	無>有	d>b>c>a	a,c : 無>有
	c. 暴力	3.82	.57	3.24	.94			無 : d>a,b
	d. やけど	3.89	.49	3.85	.55			有 : d,b>c>a

\*\* $p<.01$ , \* $p<.05$ , + $p<.10$

Table 5 虐待因子の各項目についての虐待の実行可能性における分散分析の結果

		被虐待経験				経験	可能性	経験×可能性
		無( <i>n</i> =56)		有( <i>n</i> =34)				
		<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)	<i>F</i> (1, 88)
虐待可能性	a. 暴言	1.21	.49	1.94	.77	23.11 ***	29.98 ***	17.57 ***
	b. 世話をしない	1.13	.33	1.18	.38	無<有	d, b<c<a	a, c : 無>有
	c. 暴力	1.09	.29	1.62	.77			有 : d, b<c<a
	d. やけど	1.05	.23	1.09	.28			

\*\**p* < .01, \**p* < .05, +*p* < .10

限の世話をしない」(以下、世話をしないとする)、「殴ったり、蹴ったりする」(以下、暴力とする、「熱湯などをかけてやけどを負わす」(以下、やけど))を独立変数とする分析を行った。

まず、虐待に対する意識について、被虐待経験(有・無)と虐待因子の項目(4項目)による分散分析を行った。その結果(Table 4), 被虐待経験および項目の主効果と交互作用が有意であった(順に  $F(1, 88)=7.60, p<.01$ ,  $F(1, 88)=25.19, p<.001$ ,  $F(1, 88)=17.53, p<.001$ )。被虐待経験については、被虐待経験有群より経験無群の方が、虐待に対する意識が低いことが示された。項目の主効果については、Ryan法による多重比較の結果、「やけど」「世話をしない」「暴力」「暴言」の順に得点が高かった(いずれも  $p<.05$ )。

有意な交互作用について下位検定を行った結果、「暴言」と「暴力」で有意差が認められ、被虐待経験有群より経験無群の得点の方が高かった。また、経験無群では「やけど」が「暴言」「世話をしない」得点よりも有意に高く、「やけど」「暴力」「暴言」「世話をしない」の順で得点が高かった(いずれも  $p<.05$ )。被虐待経験有群では、「やけど」「世話をしない」>「暴力」>「暴言」の順で得点が高かった(いずれも  $p<.05$ )。

このことから、「やけどを負わす」や「世話をしない」といった行為については、被虐待経験を問わずしつけの範疇を超えた虐待行為であると認識しているようである。一方で、「暴言」と「暴力」については、被虐待経験の有無によって虐待に対する意識に違いが示され、被虐待経験がある者は経験の無い者

よりも、該当行為に対して虐待意識が低かった。暴言および暴力行為は、しつけと虐待の線引きが曖昧と言われている。例えば、李・安山(2002)では、未就学児の母親が「大声で叱る」「お尻を叩く」「手を叩く」の3つの行為をしつけとして認識していることが報告されている。つまり、明らかな虐待行為については、虐待を受けたという経験が当該行為の虐待意識を低下させることはない一方で、曖昧な行為である暴言や暴力行為をうけた経験は、当該行為の虐待意識を低下させる可能性があると考えられる。ただし、いずれの得点においても中央値(2.50)よりも高い数値であることから、こうした行為が虐待であるという意識は残存しているようである。

## (2) 虐待の実行可能性の検討

虐待の実行可能性について、被虐待経験(有・無)と項目(4項目)による分散分析を行った。その結果(Table 5), 被虐待経験および項目の主効果と交互作用が有意であった(順に  $F(1, 88)=23.11, p<.001$ ,  $F(1, 88)=29.98, p<.001$ ,  $F(1, 88)=17.57, p<.001$ )。被虐待経験については、経験無群の方が被虐待経験有群より虐待の実行可能性が高いことが示された。項目の主効果については、Ryan法による多重比較の結果、「やけど」「世話をしない」<「暴力」<「暴言」の順で得点が低かった(いずれも  $p<.05$ )。

有意な交互作用について、下位検定を行った結果、「暴言」と「暴力」で有意差が認められ、被虐待経験有群より経験無群の方が、得点が高かった(いずれも  $p<.05$ )。また、経験有群では、「やけど」「世



話をしない」<「暴力」<「暴言」の順で得点が低かった (いずれも  $p<.05$ )。一方、被虐待経験無群では有意差が認められなかった。

このことから、被虐待経験の有る者は経験の無い者に比べて、暴言や暴力行為の実行可能性を高く認識していることが示された。一方で、世話をしないや「やけどを負わす」行為では、そのような差は生じなかった。暴言や暴力行為を受けた経験が当該行為の実行可能性を高めることから、虐待の世代間連鎖は全ての行為で起こるのではない可能性が示された。ただし、虐待意識の結果と同様に、実行可能性は中央値 (2.50) を大きく下回っていた。

#### 4) 被虐待経験と虐待意識および虐待の実行可能性との関連についての検討

##### (1) 尺度間の関連

本研究では、自身の被虐待経験によって虐待行為に対する意識が低下し、虐待が発生しやすい状況になるという問題意識から様々な検討を行い、被虐待経験が虐待意識とその実行可能性に影響を与えることが示された。そこで、さらにそれぞれの関連について明らかにするため、被虐待経験が虐待意識を介して、あるいは直接虐待の実行可能性に影響を与えるというモデルを用いた共分散構造分析による検討を行った。その結果、Figure 1 に示すモデルが得られた。つまり、被虐待経験が虐待意識への負の影響と、被虐待経験から虐待への実行可能性への正の影響が示された。しかし、虐待意識が虐待の実行可能性に与える影響は示されなかった。

以上のことから、被虐待経験は虐待意識を低くするが、虐待意識の低下によって実行可能性が高まるというパスは指示されなかった。虐待意識と実行可能性の関連が有意でなかったという結果は、虐待意識の有無に関係なく、虐待を行う可能性があるということを示すものである。この点については、厚生労働省 (2013) が、「不十分な養育が「当たり前」として育つため、自分が親になった時にも、自分の子どもに適切な養育を行えなくなる可能性がある」という指摘とは異なるものであり、「しつけのつもり」で虐待の加害を説明することが困難であることを示

す結果である。

一方で、本研究で示されたモデルでは、虐待の実行可能性は被虐待経験から直接の正の影響が示されている。この点については、児童虐待を行う要因が多様であることから分かるように、児童虐待の被害経験があると実行可能性が高まるという単純な関連ではなく、被虐待経験が様々な要因を経て、実行可能性に影響を与えていると考えることが妥当であろう。先述の曾田・大河原 (2014) が示す「愛着システム不全のモデル」と本研究の結果を合わせて考えると、虐待は養育者が持つ子どもや子育てに対するネガティブな感情が生起することで発生する可能性が高いと考えられる。実際に、先述の厚生労働省 (2019) の報告において、虐待死に至った加害動機に「子どもの存在の拒否・否定」「泣きやまないことにいらだったため」というようなネガティブな感情の生起によるものが挙げられている。

##### (2) 虐待因子の各項目における関連

次に、虐待の種別によって被虐待経験と虐待意識、およびその実行可能性の関連が異なるかどうかを検討するために、因子の項目ごとに共分散構造分析を行った。ただし、「やけど」については、被虐待経験があった者が少なかったため、分析から除外した。

分析の結果、Figure 2～4 に示すモデルが得られた。「暴言」については、被虐待経験から虐待意識への負の影響、虐待意識から虐待の実行可能性への負の影響、および被虐待経験から虐待の実行可能性への正の影響が示された。「暴力」については、被虐待経験から虐待意識への負の影響、および被虐待経験から虐待の実行可能性への正の影響が示された。「世話をしない」については、被虐待経験から虐待の実行可能性への正の影響が示された。

以上の結果から、いずれの虐待行為においても被虐待経験と実行可能性との間に有意な正のパスが示された。つまり、「暴言」「暴力」「世話をしない」の各行為を実行する可能性は、当該行為が虐待かどうかの判断には影響を受けない場合があることが分かった。この結果は、当該行為がしつけとして認め

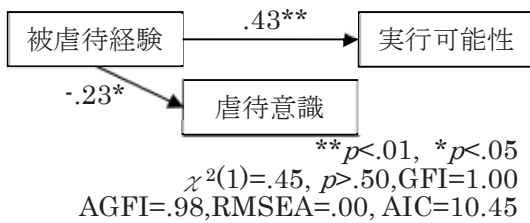


Figure 1 被虐待経験と虐待意識および虐待の実行可能性との関連

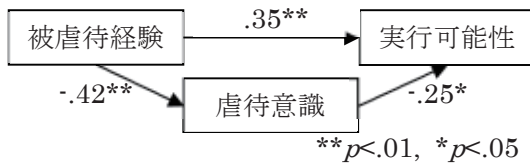


Figure 2 「暴言」における被虐待経験と虐待意識および虐待の実行可能性との関連

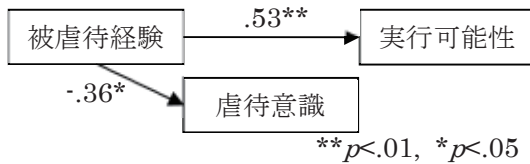


Figure 3 「暴力」における被虐待経験と虐待意識および虐待の実行可能性との関連

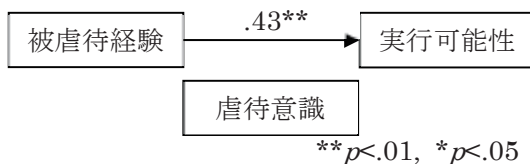


Figure 4 「世話をしない」における被虐待経験と虐待意識および虐待の実行可能性との関連

られるかどうかに関係なく、当該行為を行うことを意味しており、先述の曾田・大河原(2014)が示すモデルのように、養育者が子どもや子育てに対するネガティブな感情を生起したことによって虐待が起

きる可能性を示している。

次に、被虐待経験が虐待意識を介してその実行可能性に与える影響については、虐待の種別によって異なる結果が示された。まず、被虐待経験から虐待意識へのパスは、「暴力」と「暴言」には見られたが、「世話をしない」では見られなかった。有意なパスが見られた暴力と暴言は、先述の通り、虐待なのかしつけなのかの判断が曖昧ないわゆるグレーゾーンの行為である。つまり、虐待なのかしつけなのかの判断が不明確な行為については、当該行為を受けた経験が虐待意識を低くする可能性が考えられる。一方で、「世話をしない」行為は明らかな虐待行為であるため、そうした経験があっても、当該行為に対する意識の低下につながらなかったと考えられる。

虐待意識が虐待の実行可能性に与える影響については、「暴言」のみ有意な負のパスが示された。この結果は、「暴言」行為に対する虐待意識が高い場合は当該行為を行わず、虐待の意識が低くしつけの範囲と捉えてられる場合は当該行為を行う可能性が高くなるということである。つまり、暴言行為においては、厚生労働省(2013)が指摘する不十分な養育が「当たり前」となってしまうことによって、「しつけのつもり」で虐待行為が生じる可能性があることが示唆される。

一方で、これまで虐待のグレーゾーンとされていた暴力行為については、虐待意識を介して実行可能性を高めるというパスが示されなかった。この点については、本研究での質問項目による影響が少なからずあったと考えている。例えば、先述した李・安山(2002)においては、しつけとして認識されている暴力行為として、「お尻を叩く」や「手を叩く」が含まれていた。それに対して、本研究では、「殴ったり、蹴ったりする」という項目を用いて暴力行為を測定した。本研究で使用した「蹴る」行為については、「叩く」行為よりも虐待である認識が高いことが分かっている(例えば、李・津村(2014))。また、「叩く」行為についても、体の部位によって虐待の認識が異なることが分かっており、お尻や手はしつけとして認識される反面、頭や顔は比較的虐待と認識されることが報告されている(李・津村、

2014)。本研究では「殴る」という言葉を用いており、殴った体の部位については明記していない。しかし、「殴る」という言葉を用いた場合、頭や顔を殴るというイメージを持つ可能性は高い。こうしたことから、本研究では、「殴る」「蹴る」という表記を用いたため、虐待としての認識を高めた可能性がある。これらの結果について、先行研究の見解を含めると、本研究で明らかとなった暴言行為だけではなく、「お尻や手を叩く」といった一部の暴力行為においては、被虐待経験が虐待意識を介して実行可能性を高めることも考えられる。この点については、今後さらなる検討が必要となる。

#### 4. まとめ

本研究の目的は、被養育経験が虐待に対する意識および虐待の実行可能性に及ぼす影響を検討することであった。その結果、被虐待経験が虐待に対する意識(虐待意識)を下げるが、虐待意識が実行可能性に及ぼす影響は限定的であった。具体的には、暴言行為については、虐待意識の低下が実行可能性を高めることが示され、被虐待経験によって暴言行為がしつけの範囲内という認識に陥ることで当該行為を行う可能性を高めることが示された。一方で、暴言行為以外の行為については、虐待意識と実行可能性に関連がなかった。これまでの児童虐待に関する研究においては、児童虐待の関連行為を包括して「しつけのつもり」で行うかどうかという議論がなされてきた。しかし、本研究の結果から児童虐待の関連行為には「しつけのつもり」で行う行為と「しつけのつもり」では行わない行為が存在する可能性が示された。このことは今後の児童虐待研究において、種別ごとの詳細な検討が必要であることを示唆するものである。

また、本研究の結果においては、いずれの児童虐待に関連する行為も虐待意識以外の影響が大きいことが示された。この結果は、児童虐待予防への取組に対する示唆を与える。近年、児童虐待防止法の成立や児童虐待に関する行政の広報によって児童虐待に対する意識が高まっている(李・津村, 2014)。こうした児童虐待意識を高める啓発活動は、児童相

談所における児童虐待相談の対応件数の増加といった大きな効果となっている。しかし、本研究の結果からは、児童虐待意識の高まりが児童虐待の実行可能性に与える影響が一部の行為に限定されていた。そのため、こうした啓発活動だけでは児童虐待の予防は不十分であり、児童虐待の加害者となりうる養育者への支援体制の充実を図る重要性が改めて確かめられた。虐待の世代間連鎖という視点から考えると、例えば林・横山(2010)は、世代間連鎖が伝達されない一因として社会的なサポートの享受を挙げている。つまり、何らかの危機に直面した際に自分を助けてくれる配偶者や友だち、専門機関の先生や医師などの社会的資源がいる場合は、虐待を低減することができるのである。児童虐待の予防のためには、日常的な悩みを気軽に相談できるような行政機関との連携を含めた地域のコミュニティづくりの在り方を検討することが望まれる。

最後に本研究の課題を2点述べる。まず、児童虐待のメカニズムの検討についてである。本研究では、被虐待経験とその実行可能性を検討する媒介変数として、虐待意識を取り上げて検討した。その結果、虐待の実行可能性への影響は、虐待意識以外によるものが大きいことが明らかとなった。児童虐待のメカニズムについては、曾田・大河原(2014)のモデルが示すような子どもや子育てに対するネガティブな感情が生起することによるものも考えられるが、今後さらなる検討が必要であろう。

次に、研究方法による課題である。本研究では虐待の世代間連鎖について、大学生を対象に虐待の実行可能性によって検討した。しかし、虐待の実行可能性はあくまでも可能性であり、実際に実行するかどうかを測定していない。今後は、倫理的な課題を配慮しながら、児童虐待の加害経験のある者を対象とした詳細な検討を行うことも考えられる。

#### 引用文献

曾田理沙・大河原美以(2014) 児童虐待の背景にある被害的認知と世代間連鎖—実母からの負情動・身体感覚否定経験が子育て困難に及ぼす影響— 東京学芸大学紀要(総合教育科学系), 65



- (1), 87-96.
- Hammond, M. V., Landry, S. H., Swank, P. R., & Smith, K. E. (2000) Relation of mothers' affective developmental history and parenting behavior: Effects on infant medical risk. *American Journal of Orthopsychiatry*, 70, 95-103.
- 林裕美・横山恭子(2010) ネガティブな被養育経験を持ちながら適切な情緒応答性を示す母親の特性について－負の世代間伝達を断ち切るために－ 上智大学心理学年報, 34, 33-42.
- 厚生労働省(2013) 子ども虐待対応の手引き. [https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo\\_kosodate/dv/dl/120502\\_11.pdf](https://www.mhlw.go.jp/seisakunitsuite/bunya/kodomo/kodomo_kosodate/dv/dl/120502_11.pdf) (2019年9月25日最終アクセス)
- 厚生労働省(2019) 子ども虐待による死亡事例等の検証結果等について(第15次報告) <https://www.mhlw.go.jp/content/11900000/000533868.pdf> (2019年9月25日最終アクセス)
- 文部科学省(2007) 養護教諭のための児童虐待対応の手引き. [http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kenko/hoken/08011621.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/08011621.htm) (2019年9月25日最終アクセス)
- 中嶋みどり(2004) 非臨床群の母親における児童虐待相当行為に関連する心理的要因の検討 広島大学大学院教育学研究科紀要(第三部教育人間科学関連領域), 53, 249-257.
- 西澤哲(2010) しつけと虐待の境目－親による体罰を考える－ 児童心理, 64 (13), 1122-1127.
- Olibver, J. E. (1993) Intergenerational transmission of child abuse: rates, research, and clinical implications. *American Journal of Psychiatry*, 150, 1315-1323.
- 李璟媛・津村美穂(2014) 未就学児の父親におけるしつけと虐待に関する認識と経験－2000年と2010年の2つの調査に基づいて－ 比較家族史研究, 28, 88-118.
- 李璟媛・安山美穂(2002) どこまでが「しつけ」でどこからが「虐待」なのか－実態調査に基づく推定の試み－ 宮崎大学教育文化学部紀要(芸術・保健体育・家政・技術), 7, 1-19.
- Thonberry, T. P., Freeman-Gallant, A., Lizotte, A. J., Krohn, M. D., & Smith, C. A., (2003) The intergenerational transmission of antisocial behavior. *Abnormal Child Psychology*, 31, 171-184.
- 八重樫牧子(2005) 大学生とその母親の児童虐待意識の関連性 川崎医療福祉学会誌, 14 (2), 415-423.
- 山懸然太郎(2013) ライフサイクルと虐待の世代間連鎖 母子保健情報 67, 11-13.

#### 謝辞

調査に協力していただいた皆様ありがとうございました。

(受稿 2019年10月11日, 受理 2019年11月27日)